



Title	ソースコード解析ツール開発支援システムの試用
Author(s)	高田, 智規; 佐藤, 慎一; 飯田, 元 他
Citation	電子情報通信学会論文誌D-I. 1997, J80-D-I(3), p. 317-318
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/26455">https://hdl.handle.net/11094/26455</a>
rights	copyright©1997 IEICE
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## ソースコード解析ツール開発支援システムの試用

高田 智規<sup>†</sup>佐藤 健一<sup>†</sup>飯田 元<sup>††</sup>井上 克郎<sup>†</sup> (正員)

Trial on Development Support Systems of Dependence Analysis Tools

Tomonori TAKADA<sup>†</sup>, Shinichi SATO<sup>†</sup>, Hajimu IIDA<sup>††</sup>, Nonmembers, and  
Katsuro INOUE<sup>†</sup>, Member

<sup>†</sup> 大阪大学大学院基礎工学研究科、豊中市  
Graduate School of Engineering Science, Osaka University, Toyonaka-shi,  
560 Japan  
<sup>††</sup> 奈良先端科学技術大学院大学、生駒市  
Nara Institute of Science and Technology, Ikoma-shi, 630-01 Japan

あらまし ソースコードの解析を行うツールの作成を支援するシステムが利用できるようになってきた。本論文ではそのようなシステムの概要の調査を行う。また、開発にシステムを利用したツールと利用しなかったツールの比較を行う。その結果この種のシステムを用いない場合に比べ、少ない労力でツールが作成できることがわかった。

キーワード Sapid, REFINE, 依存関係解析

## 1. まえがき

ソースコード中の変数や文の間の依存関係を調べたりスライス[1]を抽出したりするといふいわゆるソースコード解析ツール（ツールと略す）は通常、ソースコードの構文解析、変数や文の依存性の計算、プログラム依存グラフ（PDGと略す）の構築、PDGの表示などを順に行う必要がある。一般にこれらの機能すべてをC言語などで記述するのは容易ではない。

最近、Sapid[2], REFINE[3]といったソースコード解析ツール開発支援システムが利用できるようになってきている。これらのシステムではツールに必要な基本的な機能を用意しているため、ツールの作成が容易になることが期待される。

本論文では、これらのシステムの機能の概要を調べる。また、実際にREFINEを用いPDGの表示やスライスの計算を行うツールを試作し、その有効性について述べる。

## 2. 開発支援システムの概要

ソースコード解析ツールの開発支援システムとしてSapidとREFINEを取り上げ、依存関係の解析などに有効な機能について述べる。

また、SapidとREFINEの特徴を表1に示す。

[Sapid] Sapidは、Cで記述されたソースコードの構文解析および意味の一部の解析を行い、その結果（変数の定義、使用などの情報）をデータベースとして出

表1 開発支援システムの比較  
Table 1 Comparison of development systems.

	Sapid	REFINE
対象	C	C, COBOL 等
解析	構文・意味の一部	構文
結果	データベース	木構造
UI	外部 (athena, Tk)	内部 (INTERVISTA)
相互運用性	高 (通常の C 程度)	低 (REFINE 上でのみ実行)

力する。従って構文解析部および意味解析部の一部を作成する必要はなく、依存関係解析を行う際に非常に有用である。

解析結果を図やグラフとして表示する際には外部プログラムが必要である。

相互運用性は通常のCプログラムと同程度である。また、ライブラリを利用することにより、CFG (Control Flow Graph) や PDG などを作成することも可能である。

[REFINE] REFINEの構文解析サブシステムでは、構文の定義を与えることにより種々の言語に適用できる。また、C, COBOL, Pascal(サブセット)の構文定義はあらかじめ用意されている。

REFINE言語インタプリタは、木や集合などさまざまなデータ型をもち、それらに対し豊富な種類の演算を行うことができる。図形表示インターフェースでは、木の画面上への配置やマウス操作定義などを行うことができる。

REFINE上で開発したプログラムはREFINE言語インタプリタ上でのみ実行可能であるため、相互運用性はあまり良くない。また、REFINE付属の解析ツール（CやCOBOLを対象）は利用・拡張することによりプログラムの解析を行うことができる[4]が、依存解析などのPDGの計算に必要な解析までは行っていない。

## 3. ツールの試作

この種のシステムの有効性を調べるために、REFINEを用いてツール（ツールRと呼ぶ）を試作した。

ツールRはPascalのサブセット<sup>(注1)</sup>で記述されたソースコードを読み込み、そのPDGを表示する。表示されたグラフの節点をマウスで指定することにより、スライスの抽出を行い、その結果をもとのグラフのサブグラフとして表示する。

(注1) : 変数はスカラ型のみで、条件文 (if), 代入文, 繰返し文 (while), 入力文 (readin), 出力文 (writeln), 手続き呼出し文, 複合文 (begin-end) からなる。

表2 ツール R とツール C の比較  
Table 2 Comparison of tool R and tool C.

	ツール R	ツール C
構文解析部 (行)	[730]	900 (yacc,lex)
PDG 構築部 (行)	910 (REFINE 言語)	2710 (C)
表示部 (行)	570 (REFINE 言語)	460 (Tcl/Tk)
構文解析 (秒)	5	0.11
PDG 構築 (秒)	10	0.87
PDG 配置・表示 (秒)	45	-
作成期間 (月)	1.5	6

PDG の構築およびスライスの計算には、再帰を含むプログラムを対象としたアルゴリズム [5] を用いた。

ツール R を以前作成したツール [6] (ツール C と呼ぶ) と比較した (表 2)。ツール C はツール R と同一の Pascal のサブセットを入力とし、PDG の構築、スライスの計算等を行う (但し、UI は多少異なる)。なお、両ツールとも Sun SPARCstation 10 (メモリ 64MB) 上で実行し、実行時間の比較には約 500 行の同一プログラムを入力として与えた。

ツール R の構文解析部は REFINE が提供するものを用いている。また、表示部では PDG の配置、表示およびマウス操作を記述している。PDG の配置には、REFINE 言語の木を配置する関数を利用した。一方、ツール C の構文解析部は yacc, lex を用いている。また、表示部はウィンドウ上にテキストの表示を行う。

PDG 構築部の大きさはツール R の方が大幅に小さい。これは、REFINE 言語のもつさまざまなデータ型や関数を利用したためだと考えられる。

実行時間はツール C が短くなっている。これは、REFINE 处理系がインタプリタ型であることが一つの要因であると考えられる。更に、ツール R ではシステムの起動、サブシステムの読み込みに約 2 分要した。

作成期間はツール R が短くなっている。これは、記述量と同様に REFINE 言語のデータ型・関数を利用したためだと考えられる。但し、REFINE 言語および REFINE システムの学習には数か月要した。

#### 4. むすび

ソースコード解析ツールの開発支援システムとして REFINE と Sapid を取り上げ、PDG の計算やその結果出力といった用途に有効な機能について調査した。

また、これらのシステムの有効性を評価するため REFINE を用いてツールを作成し、C 言語で記述されたツールとの比較を行った。その結果、REFINE を利用することにより記述量や作業時間を小さくすることができた。またツールの出力も、C 言語などでは実現が困難である見やすいグラフィックスにすることができるにできた。一方、システムの起動や実行にやや時間がかかることがわかった。

以上から、これらのシステムはソースコード解析ツールの試作やその評価を効率良く行うのに有効であると考えられる。

#### 文 献

- [1] M. Weiser, "Program slicing," Proceedings of the Fifth International Conference on Software Engineering, San Diego, CA, pp.439-449, 1981.
- [2] 山本晋一郎, 阿草清滋, "細粒度リポジトリに基づいたツール・プラットフォームとその応用," 情処学ソフトウェア工学研報, vol.102, no.7, pp.37-42, 1995.
- [3] "REFINE User's Guide," Reasoning Systems, 1990.
- [4] L. Markosian, P. Newcomb, R. Brand, S. Burson, and T. Kitzmiller, "Using an enabling technology to reengineer legacy systems," Communications of the ACM, vol.37, no.5, pp.58-70, 1994.
- [5] 植田良一, 練林, 井上克郎, 鳥居宏次, "再帰を含むプログラムのスライス計算法," 信学論 (D-I), vol.J78-D-I, no.1, pp.11-22, 1995.
- [6] 佐藤慎一, 飯田元, 井上克郎, "プログラムの依存関係解析に基づくデバッグ支援システムの試作," 情処学論, vol.37, no.4, 1996.
- [7] D. Atkinson and W. Griswold, "The design of whole-program analysis tools," in Proceedings of 18th International Conference on Software Engineering, pp.16-27, Berlin, March 1996.

(平成 8 年 4 月 30 日受付, 9 月 24 日再受付)